JMA 登山月報 第557号 平成27年8月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

平成 27 年度全国山岳遭難対策協議会開催 ……2
はじめての指導・遭対合同研修会を開催 ……3
平成 27 年度国際委員総会・第 34 回海外登山遭難対策研究会報告 ……4
平成 27 年度指導委員総会及び研修会報告 ……5
新連載「山の日」制定記念 ──ふるさとの山に登ろう── ……7
第 81 回 Mountain World ……8
BMC（British Mountaineering Council） ……9
International Summer Climbing Meet 2015 報告
全国規模での高校山岳部の実態調査（1） …… 11
トピックス …… 13
JMA、寄贈図書、編集後記 …… 13

No.557

平成27年度全国山岳遭難対策協議会開催

平成27年度全国山岳遭難対策協議会が７月２日（木）に霞ヶ関の文部科学省講堂で開催され、例年通り、全国から警察、消防、学校、山岳関係者等約300名が参加した。

主催者を代表して文部科学省の森岡裕策スポーツ振興課長の挨拶のあと、日程に添って進められた。

報告Ⅰは、「平成26年度中における山岳遭難の概況」が警察庁の川井伸地域課長補佐より報告された。平成26年度の発生件数は２,293件（前年対比＋121件）、遭難者数は２,794人（前年対比＋81人）、死者・行方不明者311人（前年対比－９、御嶽山噴火災害の死者・行方不明者は含まず）と、死者･行方不明者は若干減ったものの、遭難件数・遭難者数は、昭和36年以降で最多となった。60歳以上の中高年者の発生状況は遭難者数で全体の50.１％、死者・不明者は68.８％と傾向通り高い比率で､様態別では　道迷い１,163人(41.８％)、滑落501人（17.９％）、転倒401人（14.４％）となっている。発生件数は増加しているが無事救出も１,442人（前年対比＋52人）と増加している点が特徴である。

報告Ⅱは、「平成26年御嶽山噴火災害における消防機関の救助活動概要」と題して長野市消防局篠ノ井消防署の山越洋署長補佐、田中幸成係長が報告された。犠牲者57名、行方不明者６名、負傷者69名という戦後最悪の噴火災害の救助・捜索活動の様子が写真等で詳しく報告された。

報告Ⅱの後、昼食休憩の前に長野県山岳高原観光課の原一樹推進員から新潟・山梨・長野・静岡４県共同の「登山ルートグレーディング」について紹介があった。

報告Ⅲは、「火山登山者向けの情報提供について」と題して気象庁地震火山部火山課火山防災情報調整室の森井敦司火山防災係長が報告された。御嶽山の噴火災害後に設けられた火山噴火予知連「火山情報の提供に関する検討会」の最終報告を受けて、分かり易い情報提供を心がけた気象庁ＨＰ「火山登山者向け情報提供ページ」の説明と８月から運用開始する「噴火速報」について紹介された。

講演Ⅰは、「山岳地域における診療体制の現状と問題点―報告と提言―」と題して香川大学医学部付属病院手術部の臼杵尚志部長が、講演された。山岳診療所とは、どのような組織で、何を行っているのか、診療所側の問題と登山者側の問題点などの現状を話された後、登山者、行政、救助関係者等への提言で纏められた。山岳診療所は、保険診療でないことを周知願いたいとの事。

閉会の挨拶をする八木原会長

講演Ⅱは、「一般登山者の危機管理意識と安全登山技術の向上への普及啓発の方策（登山届システムコンパスの利用に触れて）」と題して日本山岳ガイド協会の武川俊二常務理事が、講演された。

日本山岳ガイド協会の概要、山岳ガイド・登山ガイドの実態、一般登山者向け公開講座など日本山岳ガイド協会の紹介に終始。2014年４月から運用開始したオンラインの登山届システム「コンパス」は、15年５月で登録者は、16,000名で、自治体・警察との閲覧協定は６県との事。

会場では専門的なレスキュー用具のほかにさまざまな登山用具や関連機器の展示も行われた。「ヒトココ」の他「ＳＡＮフラワー見守りサービス」などの新しい位置情報探知機の展示があり、注目を集めていた。

最後に「山岳遭難事故防止のために」というアピールを採択し、八木原日山協会長の挨拶で閉会した。

（記　尾形好雄）

平成27年度全国山岳遭難対策協議会
提言「山岳遭難事故防止のために」

登山者は山岳遭難事故防止のために
次のことに取り組むこと

○登山の第一歩は、目的とする山をよく理解することからはじまります。地図を基本にガイドブックや現地等から事前に山岳情報を調べること。

○登山計画書を作成して、パーティー全員がその山をよく理解するとともに、体力と経験に応じた無理のない計画であるかよく検討する。

○登山計画書を家族や職場に知らせ、また、登山口の

登山届ポスト、地元の警察署等に提出すること。

○単独登山はやめて仲間と登り、ツェルトや救急用品、非常食を必ず携行して、ゆとりある行動を心がけて、安全に登山を行うこと。

○山の事故は自己責任であることをよく考えて、山岳保険には必ず加入すること。

○危急時に確実に連絡を取れる手段を確保するために、無線機、携帯電話等の通信機器を持参して登山を行うこと。

○登山に出発する前に目的とする山域の最新の気象情報・火山情報等を入手して、現地の状況を把握すること。

○登山中は常にパーティー全員の体調や疲労に注意を払い、コースの状況・気象条件等に応じて下山するなどの冷静な判断を行い、山岳遭難事故を絶対に起こさない心構えで行動すること。

関係者は山岳遭難事故防止に向けて次のことに努める

○登山計画書の提出を奨励し、計画的で安全な登山の普及に努める。

○登山道、道標、トイレなどの整備とその適切な管理に努める。

○今後設置する道標及び案内標示の様式、表記方法等について、可能な限り統一に努める。

○詳細な山岳情報と気象情報の提供に努める。

○中高年登山者やツアー登山参加者の安全確保に努める。

はじめての指導・遭対合同研修会を開催

はじめての指導・遭対合同研修会が６月20日に熱海駅前の第１ビルで開催された。出席者は亀山副会長、小野寺事務局長、北村理事、西内登山部長、仙石登山副部長ほか指導委員会からは瀧本、蛭田、野村、工藤、本郷、鈴木が、遭難対策委員会からは町田、瀬藤、渡邉、林、清水、服巻、石田、一本松が参加した。

１日目はまずＵＩＡＡ規格の勉強からスタートした。ＵＩＡＡ規格概要の読み合わせの後、英国のシステムと日本（日体協）のシステムの比較を行った。ＵＩＡＡ規格は７つの規格（夏期ウォーキング、冬期ウォーキング、スキー登山／ツアー、スポーツクライミング、伝統的クライミング、アイスクライミング、アルパイン／高所登山など）から成り立っているが、認定を受けるのは一部だけでも良く、追加があっても良いなどその国の事情によるようであり、実際に認定を受けた国も一部だけの方が多い。

また、リーダー資格取得に必要な経験年数や年齢も国ごとに異なる。英国ではＵＩＡＡ規格で認定された夏期ウォーキングの前により簡単ないくつかの講習がある。

引き続き今後の指導者、リーダー養成制度について討議した。

ＵＩＡＡ規格と日本（日体協）のシステムの一番の違いは前者がリーダーの資格認定であるのに対し、後者はインストラクターの資格認定であるという点であるが、一般登山者の安全登山のためにはリーダーの育成が必要ということで一致した。

日本（日体協）のシステムは山岳会である程度教育されたリーダーが受講することを前提としており、インストラクターと言ってもその基本的なところの教え方はあまり無いが、一般登山者についてはその基本的なところが重要である。また、遭対のセルフレスキューの内容をもっと加味すべきという意見があった。

安全登山実践講座について指導からテキストは対象者の意見も取り入れた自信作であるとのことであったが、講習そのものは参加者が少なかった。都岳連にもさまざまな講習があり、位置づけが不明である。各都道府県でもさまざまな講習をしており、それらとの位置づけが事前に検討されておらず、どう取り扱えば良いかわからないなどの声があった。一般登山者の教育については丸投げではなく、各都道府県岳連（協会）とすり合わせしながら日山協の事業として取り組む必要がある。

２日目は登山部の組織プロジェクトの答申についての経緯説明があり、一般登山者の安全教育のためには，

これまでの指導、遭対、普及などが協力して活動する方が良いという方向になった。日本山岳協会の会員は高々日本の一般登山者の１％とも１割とも推定され，このような一般登山者の教育というミッションを達成するための組織統合であり、まず統合ありきではないとの説明であった。

実際に統合して成果を出すには、競技部や総務部への仕事の移管、一般登山者の中から指導者を養成、そのためには個人会員制度の確立など課題が多く、それらは登山部だけでは決められない。指導と遭対が一般登山者の教育について同じテーブルについて議論できるようになったので、指導、遭対で登山者教育の小委員会を作り、一般登山者の教育事業について検討することになった。　　（記　登山部長　西内　博）

平成27年度国際委員総会・第34回海外登山遭難対策研究会報告

６月13、14日の週末、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、平成27年度国際委員総会及び第34回海外登山遭難対策研究会を開催した。

13日夜からの総会には、14の岳連／協会の国際担当者が参加。新任された亀山健太郎副会長より挨拶をいただいた後、澤田国際委員長の進行により開会した。26年度の事業は収支的にも逸脱することなく無事に終了したと報告。また、27年度もほぼ前年同様の内容で事業計画、予算を立てたことを説明。その後、都岳連から、各団体の海外担当部門の活動内容や近年における役割について情報交換したい旨の提案があり、各団体からお話をいただいた。都岳連などある程度の規模のある団体では、海外登山が停滞している昨今を反映してイベント講師の選定が難しくなっていることや、参加者の伸び悩みによる採算の悪化、運営する側の人手不足や人事の停滞が報告された。また、組織規模の小さな団体では、海外担当部門としての活動がほとんどないところも複数あり、それどころか岳連本体の運営が厳しいという報告もあった。日山協の国際委員会としても、マンネリ化してきた研究会事業を整理し、その分、国際交流や情報発信などに活動をシフトしていく方向で話し合いが進んでいることを報告した。

総会終了後は夕食を兼ねた懇親会があり、その後も宿舎で語らう場があった。そこでは各団体それぞれの現状や今後について、さまざまな議論や意見交換がされていた。地方組織と日山協とでは立場が違うとは思うが、共通の認識・課題としては、以下の点にまとめられると思います。

弱体化している我々組織と関係なく、現在登山者人口は増えている。その増えている多くの登山者は､我々とは関与しない未組織登山者である。つまり我々は、現在の登山界ではマイノリティーになっているという事実がある。これからの岳連／協会や日山協を実のある組織にするために、そして日本の登山界のことを考

野口いづみ講師

えるのであれば、いかに未組織登山者に近づいていくかが最大の課題になっていると思う。今回のこうした話し合いが、今後の各団体や日山協の活動にも活きていくものと信じている。

翌14日は同会場にて、一般参加17名を含め42名の参加で遭対研が開催された。最初は野口いづみ医師による「高所障害と高所順応」についての講演。一般的な障害の症状や順応方法のお話し以外にも、順応能力に影響を与える遺伝子型のお話し、また高所でよく使われる薬品の効果と副作用についての詳細もお話しいただいた。50分の講演時間ではもったいない内容で、またしっかりと講演をしていただく機会を作りたいと感じた。

続いて遭難対策ではありませんが、根本秀嗣氏を中心としたＴｅａｍＭｏｎｓｏｏｎ（他に根津貴央氏、飯坂大氏）によるグレートヒマラヤトレイルの踏査報告。このトレイルはヒマラヤ山脈に沿ってネパールを東西に横断するトレッキングルートで、メジャーとは言えないトレイルだが、近年盛んに宣伝されている。「ヒマラヤは世界最大の里山である」を合言葉に、地元の人たちとの触れあいやヒマラヤの自然の中で暮らす人々の生活を、ＳＮＳを活用して伝える活動が報告された。

最後はウエック・トレック代表の古野淳氏に、近年のヒマラヤ地域の山岳救助事情と山岳保険について、

チーム・モンスーン

講義をいただいた。衛星電話やインターネットによる通信事情の進歩と、高所まで上がることができる高性能ヘリコプターの登場は、以前は諦めるしかなかったヒマラヤ高峰での遭難事故を、救出可能なものにしてきた。そのために事故があった場合の捜索・救助費用は、これまでになく莫大な額がかかるようになってきている。その事情に対応するために、特約を利用した登攀時適用の保険だけでなく、補償額の多いトレッキング保険や、遺体搬送も視野に入れた生命保険なども併用する手段などを紹介していただいた。また保険会社ではなくレスキュー業務を請け負うレスキュー会社も最近はあるようだ。

今回の研究会の資料には、４月25日に発生したネパール大地震の情報や現地レポートも掲載した。ネパールには思い入れのある登山者も多いことと思います。早い復興を願ってやみません。

今回の遭対研が多くの登山者の一助になればと思います。

（国際委員会　澤田　実）

平成27年度指導委員総会及び研修会報告

６月13日（土）～14日（日）、東京海員会館にて、指導委員総会及び研修会が八木原新会長、亀山新副会長参加の元、開催された。参加者は各都道府県代表46人及び講師、役員、常任委員15人の合計61人が参加。欠席は５県（42都道府県の参加）

八木原会長より、「神﨑会長の後、組織、事業の見直しを考えながら活力ある日山協を目指していきたいので、皆さんの協力をお願いしたい。」と挨拶された。

瀧本委員長からは、「日体協の受講管理システムの制度が大きく変わる。ＷＥＢ申請になり影響が出てくることが懸念される。直ぐに対応できないので紙申請になるところもあるが、ご意見を伺いながら対応していきたい。」と挨拶。

【報　告】

１．公認指導者更新登録に伴う義務研修について最近決まったこと及び指導委員会の事業内容と担当について

●義務研修申請の承認台帳の確認について

●過去の義務研修を入力する場合、指導委員会（蛭田）まで連絡の事。日体協に申し入れして、有効になるようにしていきたい。

●中央開催は今年度から指導委員会で入力。

●競技会の義務研修は、参加するだけでは認められない。審判、ルートセッターは事前に研修をしている筈なので、研修項目、時間（３時間以上）を入れてほしい。

●登山教室等は講師での参加なら認められる。

●ＳＣの役員は競技の時間は研修として申請する事。

●１年前の義務研修の申請が遅い。開催１ヵ月前までには事前申請する事。

２．ＡＣ、ＳＣ指導者の分離について

●日体協のデーターベース上では区別していない。日体協との協議で区別できることになった。

●ＡＣ、ＳＣ両方の資格を持つ人は、更新料（２,000円）のみが増える。

●分離した場合、国体の監督資格はＳＣが好ましいが、現状では支障が出るのでＡＣでもＯＫとして運用する。

●２つの資格保有者の義務研修は、ＳＣ、ＡＣどちらでも良い。

●日体協の都道府県毎の義務研修について今までは認めていなかったが、ＳＣはそちらのほうが役に立つこともあるので、ＳＣについては認める方向で進めたい。将来的にはＡＣも検討したい。申請を日体協がやってくれるのもメリットだ。北海道の人が東京

の研修を受けてもＯＫ。エンジョイスポーツの研修が役に立つし、良いとの意見もある。

＜参加者からの質疑＞

転勤先の岳連の方に連絡して対応すればよいのではないか。否、認めるべきじゃない。その機会がないと岳連の研修に出てこないことや岳連との接触が無くなる。許してしまうと指導委員長が指導員の力量等が把握できない、との意見もあった。

これについては、指導常任委員会で預かり、検討する事になった。（※28年４月からＳＣとＡＣに分かれる。）

３．指導員養成講習会の受講条件について

現状では、所属会でのリーダー実績と規定されている。（ＳＣはクライミングの指導の実績）

受講者を制限する条件では公益目的事業として認められないので、グループ登山でのリーダーにするなど検討する必要がある。他山岳団体でも受講できるようにしていかなければならない場面も考えられる。

どのように構築していくかが問題。個人会員でも受講できるか､元山岳会に入っていた人もおり､リーダー、サブリーダーの山行履歴は変わらない。各都道府県で山歴書にて判断して貰うようにしたい。

４．新受講管理システムについて

日体協システムからのＰＣ入力が大きく変わる。誰もが登録入力できるようになる。

基本的には受講者本人が入力することになる。今年は代理入力するか、認めた方に入力してもらうことになる。都道府県の担当者が詳細を作って、本人に入力してもらうことが基本。

５．平成27年度及び28年度登攀研修会の開催について

今年度の神奈川開催の確認と平成28年度は長崎開催で了承された。

６．ＳＣ上級指導員養成講習会の中央開催について

①主管：兵庫県（７月３～５日）

②主管：東京都（７月10～12日）

７．平成28年度日体協公認スポーツ指導者功労表彰候補者の推薦について

目次俊雄（千葉）、瀧本健（東京）、前田善彦（奈良）の３氏の推薦が了承された。

【講　演】

スポーツクライミング日本代表選手で大学スポーツクライミング協会理事の羽鎌田直人氏を講師に迎え「最新スポーツクライミングの現状について」のテーマで講演していただいた。

スポーツクライミングの競技人口は約50.２万人で柔道の競技人口より10万人少ないが、トライアスロンよりは10万人多い。クライミングジムは353店舗で５年前の３倍に急増。現在、スポーツ文化としてつきものになっている競技中のＢＧＭは大学大会では禁止など、実際の大会風景の映写を交えながらお話ししていただいた。

【ブロック別意見交換会】

全国４ブロックに分かれて「安全登山実践講座開催にあたっての課題」をテーマに下記の４点について討議した。

①講習会費用（19,000円は適正か）について

②受講者の募集方法について

③テキストのみの販売について

④平成27年度開催の都道府県岳連について

講習会費用については、19,000円の受講料は高いという意見が大半であった。

募集方法については、テレビ、ラジオ、新聞等で募集できないか。日山協で募集用ポスター、パンフレットを作れないかなど、いろいろな意見が出て討議された。

平成27年度の開催予定は、山梨県のみ。

閉会式では、亀山副会長から「各委員会に顔を出して、運営にお役に立ちたいとの思いで参加した。登山界を取り巻く環境は混沌としている。約890万人とも言われる登山人口のうち組織登山者は約20万人。一般登山者を取り込む余地は十分にある。公益法人だからと言って肩肘はるような団体ではないが、ステータスは高い。税制の優遇もある。助成金も取りやすい。ビジネスチャンスも増えていく。今後とも意思の疎通を図りながら尽力したい。」と挨拶があった。

瀧本委員長からは、「いくつも宿題を作ってしまった。早急に取り組みたい」と締めくくられた。

平成28年度委員総会は、６月11日～12日の予定。

（文責：指導常任委員　野村善弥）

新連載

「山の日」制定記念
―ふるさとの山に登ろう―
京都府

山地と丘陵地が75％を占める「京都府」には海抜１，000mを越える山はなく、昔から人々が岩座（いわくら）とし、御神体として崇める高く威風堂々とした独立峰や岩肌も、また露に猛々しく近寄り難い様相をした山もありません。

しかし、長く都であったが故の必然性に伴った個人的、社会的な歩みは、何時しか「山」と同化した歴史の年輪を育てあげました。

それは清浄閑静な伽藍であったり、「都」に必要な自然物を活用した供給村落、なおまた数知れず張り巡らされた武士や旅人が通り、物資を運んだ村落間連絡道であります。そこには安全を願った地蔵尊や一息入れたであろう茶店跡、そして諸々の伝承地をいたるところに残したのです。

このことは、山域の中に社会が共存し、人と山とが密に係った証であると思います。

一方、社会が近代化され人の生活が全く変わった「大正期」に入って、京都の山には情熱に満ちた「ヤブ山漂泊」「深山漂泊」の魅力に取付かれた登山家や探検家が集う山域が生まれ、「北山」と呼ばれるようになりました。訓練の場を提供した「北山」は、山野を自在に跋渉する登山家を育て、日本初期の海外登山や探検登山と大きな係りを持ち、その役割を果たしたのです。

それから80年、老若男女だれもが安心して楽しめるトレッキングコースとして「京都一周トレイル」が誕生しました。

「京都一周トレイル」とは「平安建都1200年記念事業」の一環として、市民の健康増進に寄与することを目的の一つに取り上げたコースであって、平成５年の東山コース開設から始まり計画に基づき順次延伸し、現在、伏見桃山城から「京都市街」を囲む三方の山域、「東山」「北山」「西山」を縦走して、嵐山から名刹「苔寺」に達するコースとなっています。（地図記載距離＝83.6km）

この様に南面が大きく開け、三方を山が取り巻く「独特の地形」がもたらす特色は、かつての「平安京」を様々な方向から眺めることが出来ると共に、一部を除いてどこからでも交通機関に辿り着ける道が数多く分岐、合流します。これは、山の経験が浅い方、子供や高齢な方であっても自分の体力に合わせたコース選定ができるとともに、万一登山中、身体の不調を兆した場合など、いつでもエスケープコースが選べるということです。

大文字火床と京都北山

道は、連盟会員の努力により水切り、ステップ、倒木処理等整備が行なわれているとともに矢印表示板が設置され、迷わないで安全に歩けるよう整備されています。

この様な地形と歴史を辿る「京都一周トレイル」は、京都市の繁華街から僅かな距離と時間で、木々が覆い鳥がさえずる優しい緑と景観の中に身を委ねることができます。

ゆったりとした歩調で歩きながら周りの景色に浸るのもよし、鳥の声に喜びを感じ、木々や草花に季節の移ろいを覚えるのもまたよし。やがて街が見渡せるところにたどり着けば古の都に思いを馳せ、一時瞑想にふけるのも一興かと思います。

また、足元にあっては綿々と続いてきた古都伝承の地や、繁栄と衰退がもたらした史跡を踏み越えて、今に残る神社仏閣の境内に至っては荘厳、森閑とした雰囲気の中にしばし時空の世界を味わってもらえるなら、なお一層京都一周トレイルに親しみを持って頂けることでしょう。

（京都一周トレイル委員会；委員長　松本二郎）

※トレイル地図区分における北山東部と北山西部は、保護者や山行経験者と同行して下さい。京都一周トレイルには右京区京北に「京北コース」約45kmがありますが、紙面の都合上、割愛しましたこと、ご理解下さい。

（表紙写真は、水井山・比良山を望む）

第81回 Mountain World

カラコルム2015年夏 速報

池田常道

バルトロ氷河の夏は、高峰登山に関するかぎり早くも７月で終わりを迎えた。異常な高温のため高所の雪質が悪化して雪崩の危険が増し、ルートの下部では積雪が消えて氷が露出し、流水や落石に脅かされるといった、ここ数年で最悪のコンディションが各隊を悩ませたためである。

春のネパール大地震でチベットを含めた8000m峰登山は軒並み断念に追い込まれた。とくにエヴェレストは、前年アイスフォールで起きた雪崩事故を契機としてシェルパの登山ボイコットに発展しただけに、２年続けてドル箱を失ったHimex（ラッセル・ブライスのヒマラヤン・エクスペリエンス）など有力公募隊がバルトロ氷河の巨峰に活路を求めた。しかし、今季のK2（8611m）は彼の強力なシェルパ・チームをもってしても手に負えず、これまでエヴェレストでやってきたように、先陣を切ってルート工作を進めるまでには至らなかった。いったん工作したルートも、悪天候でBCに下りている間に雪崩で破壊されるなど、あまりにも危険と見たブライスは7月なかばにK2断念を決め、ブロード・ピーク（8051m）への転身を決断。石川直樹を含む８人がシェルパ／高所ポーター８人とともに７月27日に攻撃したが、天候急変に妨げられた。

2012年に30人の大量登頂を成功させた、チャン・ダワ・シェルパのセブンサミット・トレックス＆エクスペディションズ隊は7月24日にBCを出て攻撃したが、取り付きに設けておいたABCが雪崩に埋まり、３日間かけて掘り出したものの、ヘルメットやアイゼンなど重要装備が損傷しており、断念に追い込まれた。公募隊に属さないマイク・ホルンのスイス隊とカルロス・スアレスのスペイン隊各３人は、23日にC3まで登ったものの、雪崩と落石を恐れて断念した。

ブロード・ピークでも状況は同じだった。K2に向けて順応行動するため７月13日にC3へのルートができたものの、20日にC1を目ざしていた一団が雪崩に遭い、７人が流された。セブンサミット隊所属の高所ポーター、カンバー・アリ・ジャンギュパが行方不明となり、サミットクライム隊に参加していた続素美代ら数人が負傷してBCに収容された。悪天候のためヘリが飛べず、負傷者は３日間待たされた末に搬送された。24日に攻撃したイバン・バレホのエクアドル隊は深いラッセルを強いられ、C3から主稜線のコル（7900m）まで通常の倍以上の10時間半を要して敗退。スペインのオスカル・カディアチ、フアニート・オヤルサバル、アルベルト・セライン、トルコのトゥンク・フィンディクも引き返した。ポーランドのアンジェイ・バルギエルは25日に単身登頂し、頂上からスキー滑降したと報告した。もし、主峰頂上から滑ったのであれば史上初めてとなるが、前衛峰との取り違えは過去にも多くの例があるだけに、詳細が待たれる。

ガッシャブルムⅠ峰(8080m)には公募隊がいなかったため、登山者たちは自力でルートを開拓。北面クーロワールの右側を登って、７月16日に7100mまで達した。スペインのフェラン・ラトーレ、フランスのヤニック・グラジアーニ、ドイツのトム・ザイデンシュティッカーは、パキスタンのムハマッド・サディクとともに24日に登頂した。雪が深いためC3から頂上まで12時間以上を要したという。チェコのマレク・ホレチェクとトーマス・ペトレチェクは南西壁に新ルートを求めて7月中旬に入山、高所順応にとりかかっている。ホレチェクはこれまでに２回この壁に挑戦し、2012年には相棒のズデニェク・フルビーを失った。

ガッシャブルムⅡ峰（8034m）では、スイスのコプラー＆パートナーズ隊（ペーター・シャツル隊長）が登山を先導、７月17日にユーリ・コントレラス（メキシコ）ら6人とシェルパのニマ・ツィリン・ラマ、パキスタンのムハマッドを登頂させた。この日はチリのマルティン・ギルデマイスターら３人、ポーランド女性キンガ・バラノフスカも頂上に立っている。

ポーランドのオレック・オストロフスキとピョトル・スニゴルスキは24日に7600mまで到達、帰途スキーで下る途中に前者が消息を絶ち、ヘリによる捜索でも発見できなかった。ブロード・ピークから下りてきたバルギエルは、BCに駆けつけてクライマーたちに捜索協力を要請したが応じる者はなく、シェルパや高所ポーターを糾合して救助に向かおうとしたが、今季の登山は終わったとするパキスタン軍に制止された。

また、K2に失敗したマイク・ホルンは、山の下部で見つけた遺体の一部を動画撮影し、「Enjoy the video」としてフェイスブックにアップした。今季の高温で氷河上に露出した遺体を目にしたクライマーは少なくないが、臆面もなくネット上に公開した所業は心無い仕打ちだと批判の的になっている。

BMC（British Mountaineering Council）International Summer Climbing Meet 2015 報告

概要

開催日程：2015年５月10日～17日

開催場所：ＵＫ（North Wales地方）

参加国　：ブルガリア、クロアチア、デンマーク、フランス、ドイツ、インド、アイルランド、イタリア、日本、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、マルタ、モーリシャス、オランダ、ポーランド、ポルトガル、セルビア、スロベニア、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、アメリカの合計23カ国

参加者　：上記国より各１～２名が参加。今回は32人。

運営方法：

●参加者は、ＢＭＣの管理するＨｕｔで宿泊する。

●参加者は、地元ＵＫのホストクライマーとパーティを組んで登る。ホストクライマーは２日毎に代わる。エリアやルートは２人の相談で決まる。

●毎夜、ＵＫクライマーや参加者によってプレゼンテーションが行われる。ＵＫクライマーが３名、他にスウェーデン、インド、日本人クライマーから各１名がおこなった。

●希望者は、ＤＭＭの工場を見学する。

行動記録

５月９日～10日　ドバイ経由で渡英。空港からはＢＭＣの用意したバスでＨｕｔまで移動。

５月11日　クライミング

５月12日　クライミング

５月13日　クライミング

５月14日　雨が降ってクライミングは中止。ＤＭＭ工場の見学。夜は「Climibing in Japan」と題して日本の代表的な岩場、ルート、クライマーを10～15分かけて紹介した。

５月15日　クライミング

５月16日　クライミング

５月17日～18日　ドバイ経由で帰国。

ＵＫトラッドに関する気づき事項

①日本ならボルトルートにするであろう節理の乏しいフェースもトラッドルートになっている。そのためランナウトが珍しく無い。ビレイ点も作成しなくてはいけない場合が多いのでリード＆フォローが基本だった。（神林）

②綺麗に割れたクラックは少なく、フェースの裂け目やポケットなどにプロテクションにすることが多い。そのためカムよりもナッツのほうが有効なことが多い。（神林）

③プロテクションの取れるところを選んでラインがジグザグすることが多いので、ダブルロープで登るのが一般的だった。（神林）

④日本ならＦＩＸロープを張りそうな足元の悪いアプローチにもそのようなものは一切無かった。また、日本なら必ずセルフビレイをようなところ（ルートを登

りきったさきの崖の縁など）でも、セルフビレイをとらないことが多かった。（神林）

⑤人気ルートでも岩が脆かったりホールドが浮いてることが良く有った。（神林）

⑥スレートと呼ばれる岩があった。ホールドやフリクションに乏しい。濡れてもすぐに乾きやすいが、濡れているあいだは非常に滑りやすい。スレートの岩場は最小限のボルトが認められているらしかった。ＵＫでは家屋の屋根に瓦のように使用されている。日本には無いと思われる。（神林）

⑦North Wales地方は天気の変化が早く、また車で一時間ぐらいの距離でもかなり変わる。なので、もし天気が悪くてもどこかのエリアで登れる可能性はある。（神林）

感想

①日本でフリークライミングを行うときよりも、精神的プレッシャーが高かった。冬壁登攀と似た感覚だった。（神林）

②プロテクション技術やリスク管理さえできるクライマーなら、クライミングのグレードが高くなくても、ＵＫトラッドは安全に楽しめると感じた。（神林）

③ＵＫトラッドは、ムーブを組み立てるために岩を凝視するのと同じぐらいのエネルギーをかけて、プロテクションの取れる場所を探すために岩を凝視しながら登る必要があった。（神林）

④ＵＫトラッドの準備をもし日本でするとしたら、クラックをたくさん登る、ナッツの使い方を練習しておく、ダブルロープに慣れておく、などが挙げられる。（神林）

ＵＫクライミングについてホストクライマーから聞いたこと：

①ＵＫでは、各エリアの伝統を守ったクライミングが行われている。ボルトが認められていないエリアではビレイ点も含めてボルトが一切無い。ボルト有りのエリアでも設置は必要最小限で、新たなボルトの設置に関してはクライマー間の大議論の末に決められる。

②トップロープクライミングは一般的に行われない。リードの邪魔になるときにはすぐにロープを抜くのが当たり前。リード優先が徹底している。

③古くなったハーケンに関してはＵＫクライマー同士でも意見が分かれている。新しいハーケンに打ち替えるか、それともいっそボルトに替えるか、など。

●ＵＫ側のホストクライマーのなかに日本人クライマーがいた。約15年間ＵＫで生活していて地元のクライミング情報に詳しい。上記の情報は氏から得たものが多い。

（記　増本　亮・神林　裕）

モンゴルへ行かれるなら
風の旅行社名古屋にお任せ下さい
オトゴンテンゲル登山、フラワーハイキング等、乗馬だけでない魅力がモンゴルにはあります。ご友人同士、ご夫婦、山岳会の合宿等、あなただけのオリジナルプランをご提案いたします。是非お気軽にご相談下さい。
株式会社
風の旅行社名古屋
愛知県知事登録旅行業第3-1367号 日本旅行業協会正会員
総合旅行業務取扱管理者　古谷 朋之
〒460-0008　名古屋市中区栄3-7-12　サカエ東栄ビル6F
TEL 0120-987-321　FAX 052-228-6232　e-mail nagoya@kaze-travel.co.jp

快適な山小屋に泊まりながら、タスマニア島を北から南へ大縦走
タスマニア島
オーバーランド・トラック 10日間
発着地 東京　旅行代金 ¥698,000～¥718,000
出発日 11/20(金)、12/18(金)、1/29(金)、2/5(金)、3/4(金)
オーストラリアETAS（イータス＝電子ビザ 申請料金4,320円、2015年7月現在、手数料、消費税込み）の取得が別途必要となります。
旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033　名古屋 ☎052-581-3211　福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

全国規模での高校山岳部の実態調査（1）
――指導者と生徒へのアンケート結果から――

1．はじめに

高校山岳部はどのような状況にあるのだろうか。2014年７月から10月にかけて公益財団法人全国高等学校体育連盟登山専門部（以下､高体連登山部）の協力を得て、アンケート調査を行った。調査は、平成26年度年度全国高等学校総合体育大会（以下、高校総体）に出場した全校に加え、各都道府県の高体連登山専門部を通し協力をしていただける学校から回収した。全国高校総体での回収は、男子37校（36都道府県)、女子32校（32都道府県)、その後の各都道府県からの回収と合わせ、総計44都道府県126校から生徒727名、指導者169名の回答を得た。結果分析の詳細は、国立登山研修所の「登山研修Ｖｏｌ．30」で報告したが、ここではそのアウトラインを２回にわけて紹介したい。

2．指導者の回答から探る高校山岳部の現状と課題

現在の部員数は平均して１校17.6名（121校中：男女で活動している学校は１校とカウントした）だった。ただし部員数にはばらつきがあり、特定の学校に集中している傾向も見られ、20校で部員数が30名を、３校で50名を越えていた。部員数が多い学校は、特に都市部の学校で目立つが、これはインドアのクライミングを取り入れていることもその要因の一つとしてあげられるかもしれない。一方で部員数が一桁という学校も34校（28％）あった。回答121校の半数が、部員数も多い全国高校総体に参加した学校であったことを勘案すれば、全国的な部員数の実態は概ね10名程度（各学年３～４名程度）と考えられる。また、ここ10年ほどの山岳部の生徒の数についてはおよそ４割の指導者が増加もしくは微増傾向にあると回答している。少子化で子どもの数が減少している中でのこの回答は、社会現象としての山ブームが高校現場にも一定影響していると見ることができよう。

2012インターハイ苗場大会にて　幕営審査

実際にどのような活動を行っているかを登山形態で見ると、競技登山（86％)、無雪期の縦走登山（80％)、里山（60％）の割合が高い。これらは、登山道が整備された無雪期の登山と解釈してもよいだろう。しかし、そこから一歩踏み出た、登山道の整備されていないヤブ山、積雪期の山となると取り組んでいる学校の割合はいずれも20％を割り込んでいる。当然、こういった活動をするには顧問にもそれ相当の力量が要求される。クライミングについても同様で、人工壁でのクライミングは42％の学校が取り組んでいるが、沢登りは20％、自然の岩場でのクライミングは５％と割合は下がる。これらの活動は、安全について判断できる能力と技術をもった顧問でないと指導以前に安全の確保が難しい。活動割合の低い登山形態について、自身のこれまでの取り組みを尋ねた質問の回答を見ると、積雪期縦走登山36％、山スキー 30％、ヤブ山33％、沢登り38％、自然の岩でのクライミング25％、冬季のクライミング８％と経験したことのある人がいずれも４割を割り込んでいる。

2010北信越高校登山大会　黒姫山

2013読図指導をする顧問と生徒

３年間の山岳部の目標については、「楽しさを教える」「自分で計画を立てられる」「安全登山のための基本技術」などと回答した指導者が多かった。読図や幕営技術、天気図を書き予報するなど具体的な項目をあげた上で、登山形態としては、「無雪期の北アルプスの縦走登山（３泊程度）を目標にしている」という回答が３割近くあり、このあたりが一つの目安と考えられる。「高望みせず、山を知ってもらうこと」「大人になってから趣味として安全に登山できること」などという回答がある一方で、「オールシーズン山で生活できるようにする」「冬山雪洞泊まで教えたい」「積雪期の高所での幕営」「（理想としては）大学山岳部の活動」といった回答もあった。「積雪期の登山」（いうまでもなく地域差はあるが）をどう取り入れるかで、登山の質は大きく変わって来る。ここには顧問個人の経験、さらには哲学や思想などが大きく反映している。

自ら山岳部員として活動した経験のある指導者は、高校山岳部経験者が27名（16％）、ワンダーフォーゲル等も含む大学での山岳部経験者が18名（10.７％）にとどまり、多くの指導者は教員となってから登山を始めたことがわかる。また、登山能力を培った場所として「社会人山岳会への所属」を挙げているのは35名（21％）のみであり、「個人的または少人数の仲間で研鑽」（84％）、「各種の登山講習会・研修会」（73％）が大きな割合を占めていた。私自身が教師になった1980年代くらいまでは、若い教師も多く、他の部活動に比べて特に負担の大きい山岳部の顧問は若い者にさせておけという風潮もあった。そして、若い教師たちは、先輩顧問に鍛えてもらいながら育ってきた。これが、「個人的または少人数の仲間」ということの意味するところであろう。高校山岳部顧問には、登山技術指導はもちろん、それにとどまらない教師としての引率責任、課外活動としての教育的側面も問われる。その意味でも、顧問経験の長い同僚や先輩教師から教わるものは大きい。

2012インターハイ苗場大会にて

2013　長野県中信高校新人大会　御嶽

山岳部を指導する上での悩みとして、「顧問としての力量が伴っておらず不安」「若い顧問が育っていない」「顧問の高齢化や体力の低下」「顧問のなり手がない」「安全面での校内での理解が得られない」「旅費・装備費等経済面での負担が大きい」などといった声が寄せられている。これらに対しては、「指導者増加に向けた普及と指導力アップのための研修機会」「他校との交流」「学校、県教委や文科省の理解」「経済面でのバックアップ」などを期待する声も大きかった。国立登山研修所ではかつてあったような高校の顧問のみを対象にした研修が現在はない。年に２回行われる安全登山普及指導者中央研修会が形式を変えて、それを引き継いではいるものの、必ずしも高校顧問の参加は多くない。顧問の力量アップのために、教師相互の自主的な動きにも待ちながら、高体連や国立登山研修所など公的な機関による高校山岳部指導者対象の講習会や研修会の新設やより一層の充実も望まれる。それと同時に、将来の登山文化を担う若者の育成や安全登山の普及・啓発という観点で、文科省・都道府県教育委員会など行政からの有形無形のバックアップも望まれるところだ。（以下次号）

（全国高等学校体育連盟登山専門部　大西　浩）

トピックス

山岳４団体懇談会開催

本会と日本勤労者山岳連盟（労山）、日本山岳会（ＪＡＣ）、日本山岳ガイド協会（ＪＭＧＡ）の山岳４団体懇談会が７月23日に東京・神楽坂のレストランで行われた。17年目となった今年の幹事団体は労山で、懇談会に先立ち、労山の西本会長が挨拶された。続いて各団体毎に出席者の自己紹介が行われた。本会及びＪＡＣは今年度役員改選があり、新役員が紹介された。

其の後、八木原会長のご発声で乾杯し、懇談と意見交換に移った。

懇談会では、以下の報告や提案がなされた。

１．国民の祝日「山の日」の施行に向けたプレ・イベントへの協力について

２．ネパール大地震救援募金の報告について

３．スポーツクライミングの東京五輪競技候補の経過報告について

懇談会は、和やかなうちに進み、最後にＪＡＣの小林会長の締めでお開きとなった。

（出席者）労山：西本武志会長、浦添嘉徳理事長、石川友好・花村哲也副理事長、川嶋高志事務局長、ＪＡＣ：小林正志会長、吉川正幸・大久保春美副会長、佐藤守常務理事、中山茂樹・谷内剛理事、ＪＭＧＡ：磯野剛太理事長、武川俊二常務理事、金井博子事務局長、ＪＭＡ：八木原圀明会長、尾形好雄・亀山健太郎副会長、小野寺斎常務理事。

ネパール大地震救援募金

日本山岳協会は、ネパール国民と被災された多くの皆さまに心からお見舞いを申し上げます。本協会は、日本の主要山岳６団体と緊急協議を行い、ネパールにご縁のある方々や団体の義援金を「ネパール大地震救援募金」として、心を一つにして募集し、ご寄附いただいた金額の全部がネパールの被災者に直接届くようにする手段を講じることで合意しました。

【払込み方法について】

●みずほ銀行　渋谷支店
普通口座　３３８２５０１
口座名「公益社団法人日本山岳協会免税口」

●郵便局の郵便振替払込用紙を使われる場合は、口座記号番号：00110－５－546693、加入者名：公益社団法人日本山岳協（通信欄に「ネパール大地震救援募金」とお書き下さい。）

JMA

平成27年度７月（27年７月）
常務理事会議報告

日　時　平成27年７月９日㈭
17時45分～21時
場　所　岸記念体育会館103会議室
出席者　八木原会長、尾形・國松・髙橋・亀山各副会長、小野寺、西内、仙石、森下、京オ、水島、瀧本、中瀬各常務理事、中畠監事
委　任　なし　常務理事
（常務理事13名中13名出席）

１．議　事

⑴平成27年度６月常務理事会議事録の承認について
異議なく承認された。

⑵平成27年度「少年少女登山教室」交付申請の承認について
尾形副会長から資料に基づいて説明があり、交付申請のあった16件について承認された。

⑶平成27年度山岳共済会「安全登山推進事業」交付申請の承認について
尾形共済会・会長から資料に基づいて説明があり、交付申請のあった９件について承認された。

⑷平成27年度専門委員会常任委員候補者の承認について
普及・ジュニア常任委員候補に一部訂正あり。また競技運営委員会常任委員候補者については都岳連と再度協議することになった。

⑸雪崩災害防止功労者の推薦
今年度は該当者無しで承認。

⑹報告事項

ア　会計月次報告
小野寺事務局長より説明があった。仮払金のうち山岳スキー競技会の会計が未精算なので早めに精算するようにとの指摘があった。賞与引当金が前月と同額だが、未だ支払われていないのか、との指摘があり、支払科目の訂正を指摘された。

イ　和歌山国体の準備について
森下競技部長から、６月の競技運営委員会に和歌山県からの出席がなく、和歌山国体の開催要項について協議ができなかったため、臨時競技運営委員会を開催した。との説明があった。和歌山国体開催要項は出来上がり次第発送する予定。

ウ　役員研修会について
國松副会長から資料に基づいて８月29日～30日に開催される役員研修会について説明があった。

エ　東京五輪2020年追加競技種目について
尾形副会長より第１次選考結果の報告と今後のスケジュールについて説明があった。

オ　平成27年度中高年安全登山指導者講習会（東部・西部地区）について
東部地区は都岳連が主管なので、瀧本常務理事から説明があり、西部地区は尾形副会長から説明があった。

カ　第54回全日本登山体育大会について
仙石常務理事から資料に基づいて説明があった。全国から岳連旗を掲出すべく協力を要請しているとの事。

キ　山岳共済会幹事会報告
尾形共済会会長から資料に基づいて説明があった。７／１現在の加入者は51543名で昨年同時期より761名の増加、７／８現在Ｗｅｂからの申込者は50件とのこと。水島常務理事から各岳連等が事業毎に傷害保険を付保するのではなく、年間事業を対象とした傷害保険の包括契約はできないかとの質問があり、損保会社と検討することにした。

ク　「山の日」制定記念祭 in 大分・くじゅう
資料に基づいて尾形副会長より説明があった。

ケ　ネパール募金山岳６団体打ち合わせ
小野寺事務局長より資料に基づいて説明があった。

コ　内閣府申請状況について
小野寺事務局長より資料に基づいて説明があった。今後は税額控除申請も行う予定とのこと。

サ　デジタル情報チーム検討会について
小野寺事務局長から検討会の報告があった。

シ　海外登山奨励金応募状況

小野寺事務局長から４隊の申請があり、これから審議予定との報告があった。４隊はフィッツロイ、チャムラン北壁、カン・ナチュゴ、フムラ・カルナリ川研究隊である。

ス　世界ユース派遣選手について

森下競技部長より資料に基づいての説明があり、小日向団長他34名の派遣が報告された。

セ　ＡＡＣ2015国際クライマーズミートの派遣について

小野寺常務理事より事前回議で承認を得た、静岡県の篠原響、原田鉄平の２名を派遣する旨、報告があった。

２．後援、協賛等の依頼について

⑴第１回Tokyo Metropolitan Mountain MTGの後援名義（山と渓谷社主催）

異議なく承認された。

⑵「山・辺境文化セミナー」後援名義（広島県山岳連盟主催）

異議なく承認された。

３．報　告

⑴環境省自然公園指導員の承認

29名の候補者推薦が異議なく承認された。

⑵上級指導員の認定承認

小澤昌史（山梨）、今村量紀（山梨）、野口明（東京）、藤山明彦（鹿児島）、以上４名が異議なく承認された。

⑶公認ルートセッター合格者の承認について

12名の合格者が承認された

⑷審判資格認定（Ｃ級審判員）者の承認

115名のＣ級審判員が承認された

４．日誌　（６月12日～７月８日）

⑴ジュニア登山教室 in 立山下見打合せ　６月14日㈪～15日㈪　於：国立立山青少年自然の家　本木顧問、西内・中瀬常務理事

⑵全国「山の日」協議会運営委員会

６月17日㈬　於：日本山岳ガイド協会事務所　尾形副会長

⑶内閣府へ平成26年度事業報告及び収支決算報告書を提出

⑷ネパール大地震救援募金打合せ

６月18日㈭　於：岸記念体育会館　尾形副会長、小野寺常務理事

⑸アンチ・ドーピング研修会　６月18日㈭　於：ベルサール東京日本橋　西原ＡＤ副委員長、西嶋常任委員

⑹スポーツ安全協会評議員会　６月19日㈮　於：東海大学校友会館・阿蘇の間　神崎顧問

⑺ＩＳＭＦ総会　６月19日㈮～20日㈯　於：スロヴァキア・Bratislava　笹生常任委員

⑻指導・遭対合同会議　６月20日㈯～21日㈰　於：熱海　亀山副会長、小野寺・西内・仙石・瀧本各常務理事

⑼平成27年度日本ワールドゲームズ協会総会　６月25日㈭　於：日本財団ビル２Ｆ　尾形副会長

⑽遭難対策委員総会・研修会　６月27日㈯～28日㈰　於：関西大学高槻キャンパス　國松副会長、西内常務理事

⑾衆議院議員衛藤征士郎君を励ます会

６月30日㈫　於：東京プリンスホテル　尾形副会長

⑿御嶽山噴火災害を踏まえた救助活動高度化検討会　７月１日㈫　於：中央合同庁舎４号館　町田副委員長

⒀平成27年度全国山岳遭難対策協議会　７月２日㈬　於：文部科学省講堂　八木原会長、尾形副会長、西内常務理事、中川事務局員

⒁役員変更・定款変更登記完了　７月３日㈮

⒂ネパール大地震救援募金打合せ

７月６日㈪　於：スポーツマンクラブ　尾形副会長、小野寺常務理事

寄贈図書

寄贈本	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「剣山物語」尾野益大 著 / 新居綱男 監修
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「四国山地のブナ」NPO法人剣山クラブ 編
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「剣山から考える霊峰と自然保護」NPO法人剣山クラブ 編
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「徳島 野生のラン」田渕武樹 著
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「シャクナゲ 夢の森」尾野益大 著 / 山田 薫 著
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「山を歩いて元気になろう 四国の山歩きベスト50」監修 日本山岳会四国支部
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「四国分水嶺」日本山岳会四国支部
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「四国山岳 四国支部報」創刊号
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「四国山岳 四国支部報」第二号
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「四国沢紀行」日本山岳会四国支部
	日本山岳会 四国支部 尾野 益大	「小島烏水に学ぶもの」日本山岳会関西支部四国同好会
	山と渓谷社	「香料商が語る東西香り秘話」相良嘉美 著
	東京新聞	「マッターホルン最前線 ヘルンリ小屋の日々と山岳レスキュー」クルト・ラウバー著
雑誌	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.818 2015 August
	山と渓谷社	「山と渓谷」No.964 2015 August
会報	どんぐり山の会	「どんぐり山の会60周年記念会報」・会報34号(CD)
	NPO日本トレーニング指導者協会	『JATI EXPRESS』Vol.47
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.447
	(一社)日本青少年育成協会	「JADAガイド／かけはし」平成27年度版
	(一財)日本万歩クラブ	「帰れ自然ヘアルク」
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳 」第577号
	横浜山岳会	「月報 山」997号 2015年7月
	(公財)全日本ボウリング協会	「ＪＢＣニュース」第524号
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース」「体協フェアプレイニュース」
	FEEC	「VERTEX」No.260
	(公社)国土緑化推進機構	「ぐりーん・もあ」第70号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.309
	(株)スクールパートナーズ	「高校生新聞・高校生スポーツ」第228号
	(公財)日本体育協会	「Sports Japan」Vol 20
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第319号
	中華民国山岳協會	「中華山岳」No.247
	溝手康史	「観光文化」226
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.486
	(公財)全国高等学校体育連盟	「全国高体連ジャーナル」2015 vol29
	(公社)日本スポーツチャンバラ協会	「SpoChan」No. 32
	日本ヒマラヤン・アドヴェンチャー・トラスト	「HAT-Ｊ ＮＥＷＳ」No.98 2015年7月20日
	(公社)日本山岳会	「山」No.842
	東京野歩路会	「山嶺」No.1025
	(公社)日本パワーリフティング協会	「JPA時報」第65号
	Korean Alpine Federation	「大山聯」Vol.199
	Corean Alpine Club	「山」Vol.243
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第424号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.668
	La rivista Club alpino italiano	「Montagne360」luglio 2015

編集後記

７月２日に平成27年度全国山岳遭難対策協議会が開催され今月号に報告がある。何れのテーマも今後ＪＭＡが向かうべき方向を示唆している。全国規模の協議を展開するには、同じような構成の下部組織（都道府県遭難対策協議会・既設約20数団体）の設置が肝心では。ＪＭＡや山岳関係団体は一丸となって組織化に助力し遭難減数に貢献する時期ではないだろうか。

（広報担当　水島彰治）

NPO法人 北丹沢山岳センター
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
蛭ケ岳山荘　TEL:090-2252-3203(衛星電話)
神の川ヒュッテ　TEL:042-787-2276
和田峠「峠の茶屋」　TEL:042-687-2882
ユーシンロッジ保全管理　TEL:042-687-4011
理事長・代表　杉本憲昭

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
◦ 陣馬高尾ムーンナイトトレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

登山月報　第 557 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成27年８月15日
発行者　東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館内
公益社団法人日本山岳協会
電　話　03 － 3481 － 2396
ＦＡＸ　03 － 3481 － 2395

山岳雑誌 岳人

山と人、
時代をつなぐ
「岳人（がくじん）」。

ひとたびページをめくると、先鋭的な現役クライマーから、散策を楽しむ登山愛好者、一線を退いた往年の登山家まで、“岳（やま）”を愛するすべての人々の想像力と冒険心をかきたてる、そんな存在でありたい。山の魅力や楽しさ、そこで生まれた文化を伝え、山と人との関係をより良いものにしたい、そんな思いを込め「岳人」をお届けします。

年間購読がおすすめです。

購読割引　送料無料　限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常本体価格12冊 8,160円（税込8,812円） → 年間購読12冊 7,480円（税込8,078円）

1年間で680円 1冊分無料

NEW 年間購読特典

9月号以降の年間購読をお申し込みのみなさまにプレゼント!

岳人オリジナル手ぬぐい & ペーパーナイフ

9月号 8/12発売

「岳人」9月号

【特　集】離島の山旅

【好評連載】夢枕 獏「『神々の山嶺』創作ノート」／フリチョフ・ナンセン「グリーンランド初横断」／石川直樹「まれびと」／秘境探訪 ほか

本体価格 680円

★モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて発売中！

年間購読お申し込み方法

◉ウェブサイトで http://www.gakujin.jp

◉お電話で（受付後に振込用紙をお送りします）
0120-982-682 ／ TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

◉全国のモンベルストアで http://store.montbell.jp

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

三井住友海上の安心
GK

www.ms-ins.com

JMA
守ります。美しい日本の山。

祝

国民の祝日

山の日

8月11日

（2016年より）

山岳保険は

日本山岳協会 山岳共済会

http://sangakukyousai.com

〒170−0013　東京都豊島区東池袋3−7−11−707
TEL:03-5958-3396　FAX:03-5958-3397
E-mail:sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月〜金　10:00〜17:00（祝日除く）

Webからも申込めます